『教行信証』における「金剛心」の意味（一）

――引文を中心に――

玉木興慈

一

筆者は既に、「「信巻」真仏弟子釈についての一考察（二）―御自釈を中心に―」（『真宗学』第一一九・一二〇号、二〇〇九年）において、金剛心について、以下のことを論じた。

すなわち、『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』と略す）において、「金剛」「金剛心」という表現は約二十九箇所に見られる。[1] またその他の和語・漢語の著作においては、ほぼ五十三箇所に見られる表現である。[2] その中には、例えば『末灯鈔』第十八通に、[3]「弥陀他力の回向の誓願にあひたてまつりて、真実の信心をたまはりてよろこぶこころの定まるとき、摂取して捨てられまゐらせざるゆゑに、金剛心になるときを正定聚の位に住す」と記されるように、獲信者の心が「金剛心になる」と記されるものもあるが、ほとんどは衆生において「金剛」を語る際に、如来回向の金剛心を受けるという表現になる。それより、金剛の真心は弥陀の真実心を指すと領解すべきであることを論じた。

本稿は、かかる点をあらためて論じるものである。

二

まず、手元にある辞書類に、金剛・金剛心について、どのように説明されているかをうかがおう。『仏教学辞典』の「金剛心」の項目には、「多くは金剛喩定を指す。浄土教では弥陀の本願を堅く信じる心をいう。」と説明され、[4] 岩波『仏教辞典』「金剛心」の項目では、[5]「仏教では、堅固で破壊されないことを金剛石にたとえることが多く、金剛心も菩薩の心を堅固不壊の金剛石にたとえていったもの。天台教学では、菩薩としての最後・最高の位である等覚の位を意味することがある。また浄土真宗では、他力真実の信心のことをいう。いずれの場合も、堅固で破壊されない心という原義を踏まえたものである」とあり、「金剛喩定」の項目には、「（略）能くすべての煩悩を打ち砕くことを喩えて金剛という。」とある。また、金子大栄・大原性実・星野元豊『真宗新辞典』では、[6]「金剛のように堅固な心。他力の真実信心をいう。……仏教一般では、金剛心とは声聞・縁覚・菩薩がそれぞれの修行をまさに完成しようとして最後の煩悩を断ずる段階の金剛喩定の心を指す。」とある。詳しい説明として、岡村周薩『真宗大辞典』には次のようにある。[7]

一は、菩薩の大心が堅固にして破壊することなきを金剛に喩えて金剛心という。（中略）二は、等覚位の菩薩の最後心を金剛心という。（中略）三に、阿弥陀如来回向の信心即ち他力信心を金剛心という。

そして、第三について「古説に喩金剛と法金剛との二を分つて、喩金剛は散善義及び信巻に云ふが如きである。法金剛は観経定善義に『金剛とは無漏の体なり』と言ひ、法事讃に『究竟解脱金剛身』と言ふは無漏法を直ちに金剛と称えた者にして是れは喩へではない、法を直ちに金剛と名けたのであるから法金剛とする」と詳説される。

三

「金剛心」に類する表現として、「金剛真心」「金剛信心」「金剛志」などがあるが、『教行信証』における使用箇所を、煩を厭わず、以下に列挙する。

1・「総序」[8]

円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信楽は疑を除き証を獲しむる真理なりと。

2・「行巻」六字釈[9]

必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。『経』には「即得」といへり、釈には「必定」といへり。「即」の言は願力を聞くによりて報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。「必」の言は［審なり、然なり、分極なり、］金剛心成就の貌なり。

3・「行巻」二教二機対[10]

また機について対論するに、信疑対、善悪対、正邪対、是非対、実虚対、真偽対、浄穢対、利鈍対、奢促対、豪賤対、明闇対あり。この義かくのごとし。しかるに一乗海の機を案ずるに、金剛の信心は絶対不二の機なり、知るべし。

4・「行巻」正信偈[11]

光明・名号因縁を顕す。本願の大智海に開入すれば、行者まさしく金剛心を受けしめ、慶喜の一念相応してのち、韋提と等しく三忍を獲、すなはち法性の常楽を証せしむといへり。

5・「信巻」別序[12]

それおもんみれば、信楽を獲得することは、如来選択の願心より発起す。真心を開闡することは、大聖（釈尊）矜哀の善巧より顕彰せり。しかるに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷ひて金剛の真信に昏し。

6・「信巻」大信釈[13]

つつしんで往相の回向を案ずるに、大信あり。大信心はすなはちこれ長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術、選択回向の直心、利他深広の信楽、金剛不壊の真心、易往無人の浄信、心光摂護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷径、証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり。

7・「信巻」大信釈回向発願心釈『観経四帖疏』引文[14]、三一問答欲生釈『観経四帖疏』引文[15]

この心深く信ぜること金剛のごとくなるによつて、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために動乱破壊せられず。

8・「信巻」大信釈『往生要集』引文[16]

『往生要集』（上）にいはく、「〈入法界品〉にのたまはく、〈たとへば人ありて不可壊の薬を得れば、一切の怨敵その便りを得ざるがごとし。菩薩摩訶薩もまたまたかくのごとし。菩提心不可壊の法薬を得れば、一切の煩悩、諸魔怨敵、壊することあたはざるところなり。たとへば人ありて住水宝珠を得て、その身に瓔珞とすれば、深き水中に入りて没溺せざるがごとし。菩提心の住水宝珠を得れば、生死海に入りて沈没せず。たとへば金剛は百千劫において水中に処して爛壊し、また異変なきがごとし。菩提の心もまたまたかくのごとし。無量劫において生死のなか、もろもろの煩悩の業に処するに、断滅することあたはず、また損減なし〉」と。

9・「信巻」三一問答欲生釈二河譬合釈[17]

二河の譬喩のなかに……「能生清浄願心」といふは、金剛の真心を獲得するなり。本願力の回向の大信心海なるがゆゑに、破壊すべからず。これを金剛のごとしと喩ふるなり。

10・「信巻」三一問答欲生釈『観経四帖疏』引文[18]

『観経義』（玄義分）に、「道俗時衆等、おのおの無上の心を発せども、生死はなはだ厭ひがたく、仏法また欣ひがたし。ともに金剛の志を発して、横に四流を超断せよ。まさしく金剛心を受けて、一念に相応してのち、果、涅槃を得んひと」といへり。

11・「信巻」三一問答欲生釈『観経四帖疏』引文[19]

またいはく（序分義）、「真心徹到して苦の娑婆を厭ひ、楽の無為を欣ひて、永く常楽に帰すべし。ただし無為の境、軽爾としてすなはち階ふべからず、苦悩の娑婆輒然として離るることを得るに由なし。金剛の志を発すにあらずよりは、永く生死の元を絶たんや。もし親り慈尊に従ひたてまつらずは、なんぞよくこの長き歎きを勉れん」と。

12・「信巻」三一問答欲生釈『観経四帖疏』引文[20]

またいはく（定善義）、「金剛といふは、すなはちこれ無漏の体なり」と。

13・「信巻」三一問答結示[21]

まことに知んぬ、至心・信楽・欲生、その言異なりといへども、その意これ一つなり。なにをもつてのゆゑに、三心すでに疑蓋雑はることなし、ゆゑに真実の一心なり。これを金剛の真心と名づく。金剛の真心、これを真実の信心と名づく。

14・「信巻」菩提心釈[22]

しかるに菩提心について二種あり。一つには竪、二つには横なり。また竪についてまた二種あり。一つには竪超、二つには竪出なり。竪超・竪出は権実・顕密・大小の教に明かせり。歴劫迂回の菩提心、自力の金剛心、菩薩の大心なり。……横超とは、これすなはち願力回向の信楽、これを願作仏心といふ。願作仏心すなはちこれ横の大菩提心なり。これを横超の金剛心と名づくるなり。

15・「信巻」現生十益[23]

「聞」といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり。「信心」といふは、すなはち本願力回向の信心なり。「歓喜」といふは、身心の悦予を形すの貌なり。「乃至」といふは、多少を摂するの言なり。「一念」といふは、信心二心なきがゆゑに一念といふ。これを一心と名づく。一心はすなはち清浄報土の真因なり。金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。

16・「信巻」信一念転釈[24]

真実信心はすなはちこれ金剛心なり。金剛心はすなはちこれ願作仏心なり。願作仏心はすなはちこれ度衆生心なり。度衆生心はすなはちこれ衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむる心なり。この心すなはちこれ大菩提心なり。

17・「信巻」三一問答三信結釈[25]

三心すなはち一心なり、一心すなはち金剛真心の義、答へをはんぬ、知るべしと。

18・「信巻」真仏弟子釈[26]

真の仏弟子といふは、真の言は偽に対し仮に対するなり。弟子とは釈迦諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行によりてかならず大涅槃を超証すべきがゆゑに、真の仏弟子といふ。

19・「信巻」便同弥勒釈[27]

弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の暁、まさに無上覚位を極むべし。念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。しかのみならず金剛心を獲るものは、すなはち韋提と等しく、すなはち喜・悟・信の忍を獲得すべし。これすなはち往相回向の真心徹到するがゆゑに、不可思議の本誓によるがゆゑなり。

20・「信巻」逆謗摂取釈『涅槃経』引文[28]

これ仏世尊なり。金剛智ましまして、よく衆生の一切悪罪を破せしむること、もしあたはずといはば、この処あることなけん。

21・「信巻」逆謗摂取釈[29]

難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまふ。たとへば醍醐の妙薬の、一切の病を療するがごとし。濁世の庶類、穢悪の群生、金剛不壊の真心を求念すべし。本願醍醐の妙薬を執持すべきなりと、知るべし。

22・「真仏土巻」『涅槃経』引文[30]

如来の身は金剛にして壊なし。煩悩の身、無常の身にあらざるがゆゑに大楽と名づく。大楽をもつてのゆゑに大涅槃と名づく」と。

23・「化身土巻」三経隠顕釈[31]

ここをもつて『経』（観経）には、「教我観於清浄業処」といへり。「清浄業処」といふは、すなはちこれ本願成就の報土なり。「教我思惟」といふは、すなはち方便なり。「教我正受」といふは、すなはち金剛の真心なり。

24・「化身土巻」三経隠顕釈[32]

またこの『経』（観経）に真実あり。これすなはち金剛の真心を開きて、摂取不捨を顕さんと欲す。しかれば濁世能化の釈迦善逝、至心信楽の願心を宣説したまふ。報土の真因は信楽を正とするがゆゑなり。ここをもつて『大経』には「信楽」とのたまへり、如来の誓願、疑蓋雑はることなきがゆゑに信とのたまへるなり。

25・「化身土巻」三経隠顕釈[33]

いま三経を案ずるに、みなもつて金剛の真心を最要とせり。真心はすなはちこれ大信心なり。大信心は希有・最勝・真妙・清浄なり。

一瞥してわかるように、『教行信証』において「金剛」に類する語が現れるのは御自釈がその大半を占める。『教行信証』は文類の形式から、御自釈に比して引文の分量が圧倒的に多い。にもかかわらず、引文においては金剛はほとんど使用されていないのである。

今、引文を見ると、8は『往生要集』、20・22は『涅槃経』、7・10・11・12は『観経四帖疏』からの引文である。20・22の『涅槃経』引文に見られる金剛は、「これ仏世尊なり。金剛智ましまして、よく衆生の一切悪罪を破せしむる」「如来の身は金剛にして壊なし」とあり、共に、仏の身・智慧を指して金剛と表されることは自明であり、仏の金剛が衆生の一切の罪悪を破ることができ、また、その金剛は壊れることがないという。

8の『往生要集』引文は、大信釈と三一問答の間に位置する引文である。かつて「信巻」の構造について、大信釈・三一問答は弥陀の真実と衆生の不実が明かされると論じたが[34]、この引文における菩提心・金剛心もまさに、弥陀の真実心を表すものである。菩提心不可壊の法薬を得れば、如何なる煩悩も壊すことができず、菩提心という住水宝珠は生死の迷いの海に於いても沈没することはなく、金剛は百千劫の間、水中に置かれても壊れたり異変がな

いという。この理解は三一問答における疑蓋の理解にも通じるものである。これもかつて論じたものであるが、[35]三一問答における疑蓋の語は、本願を疑う心ではなく、五蓋の一つとみるべきであり、それ故、疑蓋無雑とは、弥陀の本願を晴れ晴れと信じる衆生の心ではなく、衆生の煩悩を雑えず真実である弥陀の心であると理解すべきである。さすれば、この『往生要集』引文に見る菩提心・金剛とは、衆生の煩悩の生死海において、無限に壊れることのない弥陀の真実心を指すと考えられる。

四

『観経四帖疏』の引文については、大信釈中廻向発願心釈所引の文は欲生釈に重ねて引かれており、四つの引文が全て欲生釈において引文される（7・10・11・12）。

まず、大信釈と欲生釈に重ねて引かれる文（7）についてみると、『観経疏』の原意と親鸞の引意の相違がある。

『観経疏』では、[36]

また回向発願して生ぜんと願ずるものは、かならずすべからく決定真実心のうちに回向し願じて、得生の想をなすべし。

と読まれるに対し、『教行信証』「信巻」では、

回向発願して生ずるものは、かならず決定して真実心のうちに回向したまへる願を須ゐて得生の想をなせ。

と読まれる。同様の読替は至誠心に就いても見られる。すなわち『観経疏』では、[37]

一切衆生の身口意業所修の解行、かならずすべからく真実心のうちになすべきことを明かさんと欲す。……不善の三業は、かならずすべからく真実心のうちに捨つべし。またもし善の三業を起さば、かならずすべからく

真実心のうちになすべし。

と読まれるに対し、『教行信証』「信巻」では、

一切衆生の身口意業の所修の解行、かならず真実心のうちになしたまへるを須ゐんことを明かさんと欲ふ。……不善の三業はかならず真実心のうちに捨てたまへるを須ゐよ。またもし善の三業を起さば、かならず真実心のうちになしたまひしを須ゐて、内外明闇を簡ばず、みな真実を須ゐるがゆゑに至誠心と名づく。

と訓じられる。至誠心・廻向発願心共に、『観経疏』の原意では浄土往生を願う行者の心として理解されているが、親鸞はそれらを弥陀の真実心として理解すべく、緻密な読替を施している。『観経』の至誠心・深心・廻向発願心の内、深心については、読替だけではなく[38]、原文を裁断し、乃至の箇所を「化身土巻」に引文される[39]。「信巻」で乃至された文は次である。

また深心の深信とは、決定して自心を建立して、教に順じて修行し、永く疑錯を除きて、一切の別解・別行・異学・異見・異執のために退失傾動せられざるなりと。

これは、「自心を建立して」が大信ではなく、自力の信であるから、「信巻」ではなく「化身土巻」に引文されると指摘されている[40]。この指摘は尤もであるが、その他の理由として、次のことが考えられる。つまり、「一切の別解・別行・異学・異見・異執のために、退失し傾動せられざるなり」（傍点引用者）の文意が深心の釈には不適当だからである。これは、「本願他力の教えと異なるどのようなものにも、退かされたり動揺させられたりしない」という心を、至心釈・廻向発願心釈に比して、行者の心とも受け取ることのできる深信の釈に置かない配慮であると考えられる。なるほど、廻向発願心には、「回向発願して生ずるものは、かならず決定して真実心のうちに回向したまへる願を須ゐて得生の想をなせ。この心、深信せること金剛のごとくなるによりて、一切の異見・異学・別

解・別行の人等のために動乱破壊せられず。」（傍点引用者）と記され、動乱破壊されない心が説かれるが、先述の如く、廻向発願心は『観経疏』からの読替によって、行者の心ではなく、弥陀の心を指すことが明らかである。したがって、『観経疏』から大信釈に引かれる文中の金剛は弥陀の心を指すと理解すべきである。

次に、「序分義」「定善義」「玄義分」から連引される文（10・11・12）について、所謂講録の所説を簡単にうかがおう。[41]

善譲『敬信記巻十一』[42]

金剛志に就て、先つ金剛を釈するに、此に二あり。一に法金剛。二に喩金剛。その法金剛とは仏智なり。喩金剛とは世間の事物。……法金剛とは仏智。その仏智が常住不変にして、自体堅固。仏智には能断の力用あり。……此定善義の文は法金剛なり。無漏とは煩悩のなきこと。その物体は即ち弥陀の四智なり。……是の金剛は仏智のことにして、喩へに非ずと知ら令め給ふが故に、法金剛なりと云ふ。

義山『摘解巻三』[43]

上の自釈に自体に約し、引文の中の初の二文は力用に約す、以上は喩金剛の義に依る、後の一文は是れ法金剛にして、三義自ら具す。

興隆『徴決巻十』[44]

金剛は清浄に釈す。如来無漏清浄心。貪瞋煩悩の為に染汚せられず。……此の心金剛の如く、煩悩の為に壊されず。……弥陀無漏清浄心の回向する所なるが故に、金剛心と名く。この釈殊に理実を示す。上散善義の文に応じて譬に就て釈す。今定善義を引きて法の為に釈す。

石泉『随聞記巻二十六』[45]

信心の体は如来の真心。其の真心のことを金剛真心と云。金剛と云へば、仏心に局る。諸経に金剛を仏智に喩ること至て多し。……真宗亦金剛を仏智に喩ふ。……真実心は仏の金剛なり。其を衆生へ廻向し振向る願なり。其れを衆生が受取ると、此心深信由若金剛となる。……一玄義分。二序分義。三散善義。此金剛と云ふに二つあり。謂く法と喩となり。法金剛とは、仏智を指すなり。喩金剛の金剛は、世間の事物見聞する近き物を金剛と名けるなり。……法金剛とすれば仏智にて遠きもの。此れ知り難き法なり。其難知なる法金剛を、手近き世間の物を以て喩顕するから、法喩の二金剛が立つなり。今所引の三文。初の二文は喩なり。次上の釈文を承るなり。近より遠に至る次第で、第三文は法金剛を出すなり。喩金剛は世間の金剛。法金剛は出世の仏智なり。……定善義では金剛と云ふは即ち仏智の名で、喩では無ひと示す。是の故に法金剛の名なり。法金剛のこと、今少し委く弁ずべし。……三文を引て、前二は喩なり。後一は法なり。

円月『仰信録巻三』[46]

「序分義」の文。……真心徹到とは、仏の真実心、衆生の心中に徹至するを言ふ、下に之を承けて、金剛志と云ふなり。……「無漏」の体とは他力廻向の信心なるが故に、之を無漏と云ひて、凡夫有漏の心に非ざることを顕すなり。

この『観経疏』からの三つの引文は、三一問答結釈・菩提心釈の直前の説示である。菩提心釈は、種々論じられるように[47]、法然(教団)に対する明恵の批判・非難に応ずるものである。その菩提心釈の直前に置かれる引用文のうち、定善義の引文は、親鸞の金剛についての唯一の定義ともいいうるものである。『教行信証』において、引文が御自釈を助顕・補顕するものであるから、この引文の理解、すなわち、金剛を仏の無漏の体と示す理解は重要な説示と

考えなければならない。

金剛に類する語は、金剛台・金剛経・金剛身などが七祖聖教に見られるが、金剛心の語は『観経疏』に一箇所見られるのみで、他の七祖聖教にはない。明恵等に批判された『選択集』において、菩提心の語は三十五件使用されるが、金剛心の語は使用されない。金剛の語も、わずかに、『金剛頂経』・金剛薩埵・金剛界曼陀羅と、『観経疏』引文の四箇所のみである。その金剛を親鸞は、16の一念転釈や、その他「高僧和讃」に、[48]

信心すなはち一心なり　一心すなはち金剛心
金剛心は菩提心　この心すなはち他力なり

と記す。金剛心・大菩提心と転釈される願作仏心・度衆生心については、次の和讃に細かな左訓が付せられる。[49]

浄土の大菩提心は　願作仏心をすすめしむ
すなはち願作仏心を　度衆生心となづけたり
度衆生心といふことは　弥陀智願の回向なり
回向の信楽うるひとは　大般涅槃をさとるなり

この和讃において、浄土の大菩提心には「よろつのしゆしやうをほとけになさむとおもふこころなり」、願作仏心には「たりきのほたいしんなり　こくらくにむまれてほとけにならむとねかへとすすめたまへるこころなり」、願作仏心には「みたのひくわんをふかくしんしてほとけにならむとねかふこころをほたいしむとまふすなり」、度衆生心には「よろつのうしやうをほとけになさむとおもふこころなりとしるべし」「たりきのほたいしむとまふすなり」（傍点引用者）と付せられるのである。[50] 願作仏心とは、行者が仏に作らんと願う心と理解されるが、左訓の傍点部には、「仏に作らんと願え」とすすめる仏の心と受けとめた親鸞の意がみられるのである。

五

以上を勘案するならば、法然の『選択集』にほとんど用いられない金剛心の語をもって、菩提心と同等の義と示し、それを阿弥陀仏の真実清浄無漏なる心と説き示さんとする親鸞の意図を読み取ることができる。

法然の『選択集』に明かされる仏教・専修念仏に対する批判の一つが菩提心であるが、よきひと法然の仰せを受けた親鸞の菩提心理解が、『教行信証』「信巻」の菩提心釈である。親鸞が法然の仏教を顕彰しようとするならば、その顕彰・論証のプロセスに菩提心の語を使用するのではなく、菩提心と同義であり、かつ『選択集』において一度も使用されない金剛心の語を用いたのであろうと考えられる。弥陀の真実清浄無漏である金剛心が、親鸞の金剛心理解の基底にあると見なければならないのである。

紙数の都合、金剛心の御自釈については他稿に譲らねばならない。

註

（1）『親鸞聖人著作用語索引　教行信証の部』（永田文昌堂、一九六六）一四二頁。

（2）『親鸞聖人著作用語索引　和漢撰述の部』（永田文昌堂、一九七一年）一三八頁。浜田耕生氏は「真宗と金剛心」（『同朋大学論叢』第四十四・四十五合併号、一九八一年）において、「金剛」という言葉は八十回にのぼるほど度々使用されていると指摘し、了祥の『正信念仏偈聞書』によってそれらを十二義に分類する。また、梯實圓『教行信証　信の巻』（本願寺出版社、二〇〇八年）によれば、煩悩を断ち切る仏智を金剛という言葉で表す場合は「法金剛」と呼び、信心の堅固なありさまを金剛に喩える場合を「喩金剛」といわれる。

（3）『真聖全Ⅱ』六八四頁。

（4）法藏館『仏教学辞典』一四三頁。

(5) 岩波『仏教辞典』三五一頁。
(6) 『真宗新辞典』一七一頁。ここにいう「古説」とは、下に挙げる善譲『敬信記』、義山『摘解』、興隆『徴決』、石泉『随聞記』、円月『仰信録』などを指すのであろう。
(7) 『真宗新辞典』六三三頁。
(8) 『真聖全II』一頁。
(9) 『真聖全II』二二頁。
(10) 『真聖全II』四一頁。
(11) 『真聖全II』四五頁。
(12) 『真聖全II』四七頁。
(13) 『真聖全II』四八頁。
(14) 『真聖全II』五四頁。
(15) 『真聖全II』六七頁。
(16) 『真聖全II』五八頁。
(17) 『真聖全II』六七頁。
(18) 『真聖全II』六八頁。
(19) 『真聖全II』六八頁。
(20) 『真聖全II』六八頁。
(21) 『真聖全II』六八頁。
(22) 『真聖全II』六九頁。
(23) 『真聖全II』七二頁。
(24) 『真聖全II』七二頁。専心・深心・深信・堅固深信・決定心・無上上心・真心・相続心・淳心・憶念・真実の一心・大慶喜心・真実信心・金剛心・願作仏心・度衆生心・衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむる心・大菩提心・大慈悲心、と転釈される。
(25) 『真聖全II』七三頁。

(26)『真聖全II』七五頁。拙稿「「信巻」真仏弟子釈についての一考察―『安楽集』引文を中心に―」（『真宗学』第一一八号、二〇〇八年）、「「信巻」真仏弟子釈についての一考察（二）―御自釈を中心に―」（『真宗学』第一一九・一二〇号、二〇〇九年）を参照されたい。
(27)『真聖全II』七九頁。
(28)『真聖全II』八六頁。
(29)『真聖全II』九七頁。
(30)『真聖全II』一二六頁。
(31)『真聖全II』一四七頁。
(32)『真聖全II』一五四頁。
(33)『真聖全II』一五七頁。
(34)拙稿「「教行信証」「信巻」の構造―親鸞の仏道の学び―」『真宗研究』第四十七輯、二〇〇三年。
(35)拙稿「親鸞思想における疑蓋の意味」『真宗学』第一一一・一一二合併号、二〇〇五年。
(36)『浄土真宗聖典　七祖篇（註釈版）』（以下、『註釈版七祖篇』と略す）四六四頁
(37)『註釈版七祖篇』四四五頁
(38)『観経疏』の「深く信じて行ずる」（『註釈版七祖篇』四五八頁）が、『教行信証』「信巻」では、「行を深信する」（『真聖全II』五二頁）と読まれる。
(39)『真聖全II』一五〇頁。
(40)岡亮二『教行信証』口述50講　信の巻　上』（教育新潮社、一九九七年）
(41)僧鎔『一滴録』（『真宗叢書』第八巻）、智暹『樹心録巻四』（『真宗全書』第三十六巻）、柔遠『頂戴録三本』（『真宗叢書』第七巻）、玄智『光融録巻十八』（『真宗全書』第二十五巻）などには明示されていない。
(42)『真宗全書』第三十一巻一八七～一八九頁。
(43)『真宗叢書』第八巻一八二頁。
(44)『真宗全書』第二十三巻六三～六六頁。
(45)『真宗全書』第二十七巻四四二～四五〇頁。

(46) 『真宗叢書』第七巻三六二頁。
(47) 高田未明「親鸞菩提心思想の一考察」(『中央仏教学院紀要』第十四号、二〇〇三年)、森本光慈「親鸞聖人における信心観の一考察—金剛心と善鸞事件を通して—」(『行信学報』第二十三号、二〇〇一年)、星野親行「親鸞聖人の菩提心論」(『行信学報』第十号、一九九七年)など。
(48) 『真聖全II』五〇三頁。
(49) 『真聖全II』五一八頁。
(50) 浅井成海「法然門下の菩提心観(三)—親鸞の菩提心観を中心として—」(『真宗学』第九十一・九十二合併号、一九九五年。『法然とその門弟の教義研究』永田文昌堂、二〇〇四年所収)や、藤間哲祐「親鸞の菩提心観—浄土の菩提心—」(『真宗教学研究』第二十七号、二〇〇六年)、星野親行前掲論文などにも指摘される通りである。